

国土交通省 近畿地方整備局 淀川整備事務所による淀川復古計画

——昔の姿に・湾^{わんど}処——高 水域利用者達の主張に見る一億二千万総エゴイズム、国家崩壊

井上達明建築事務所 正会員 井上達明

1° 地球は青かった

「地球は青かった」は1961年にソビエトの最初の宇宙飛行士ユーリー・ガガーリン少佐の言った言葉である。海等から蒸発した水蒸気は雲となって海や地上に降り注ぐ。陸に降った雨は植物、従って動物の命を支え、又、土の中の養分や塩分を溶かし出して海へと注ぐ。水の惑星地球は、言ってみれば巨大な水の蒸留装置でもある。海の塩分はこの繰り返しを何万年何億年と続けて今の海となり、魚類の命を支える。

2° 川役目、そして川を破壊したのは誰か

川はこの連鎖の中で重要な役目を担う。川魚の命を支え、又古くから舟運や筏等、人や物資の運搬にも用いられた。ところが、多過ぎる降雨によって川が氾濫すると人や動植物に大きな被害をもたらす。何千年前の夏・殷・周の時代に禹が治水に心血を注いだことが知られている。治水に成功することが王の資格とさえされたようである。下って、日本でも200年前迄、川は舟運、灌漑、そして漁業等、人々に大きな恵みをもたらした。そもそも自然の川は上流から下流へ向かって、低地を探すようにして蛇行しながら下流へと流れていく。川岸は、恰も海水浴に適した海岸の砂浜の如く、川岸から川の中心の深い所へ向かってスロープになっており、又地形によっては湾^{わんど}処が出来たり、葦が生えたり、昆虫も生息し、これを食べる魚の命を支える。

小魚やエビがあって、より大きな魚も育つ。

(図1)

ところがこの百数十年、明治の開国以来、欧米先進国に追いつけ追い越せで、川の姿は様変わりした。土木構造物や建築に石灰岩を焼成して作ったセメントを用いて、鉄筋コンクリートを大々的に使

用し、護岸と称して、高水域と低水域があるとはいえ、その何れもをコンクリートの垂直の壁で困ってしまった。これでは昆虫も小魚も住めず、又人間にとっても緩やかに沈み込む浜辺と異なり、一旦転落するとよじ登ることが出来ず溺死する。しかも、今ではこの高水域なるものがゴルフ場、野球場等に使用されている。

3° 近畿地方整備局の淀川水系河川整備計画基礎原案(平成15年9月5日)——淀川復古

明治29年、河川法制定(洪水対策・治水を如何にするか)。昭和39年、新河川法の制定(水資源開発)。平成9年、河川法改正。従来の「治水」「水資源開発」に加えて「河川環境の保全と整備」を目的として位置づけた。従来の「行政に任せて下さい。我々が計画も決めてやります」といったやり方から「行政は勝手にしません」というやり方に変える。計画を作る際にも、住民意見を反映するような仕組みを作る。河川環境では、少しでも手伝って後は自然に任せ、昔の川のように瀬と淵があり、生き物にとって住みやすい川にする。河川敷の利用では、身近な自然空間を利用して、公園やグラウンド等を作ってきたが、これからは自然環境保全・再生することが大切である。グラウンド等のように、本来河川敷以外で利用するものについては、縮小を基本としている。しかし、既存の利用施設が数多くの人々に利用され、また住民や自治体等からはグラウンド等の

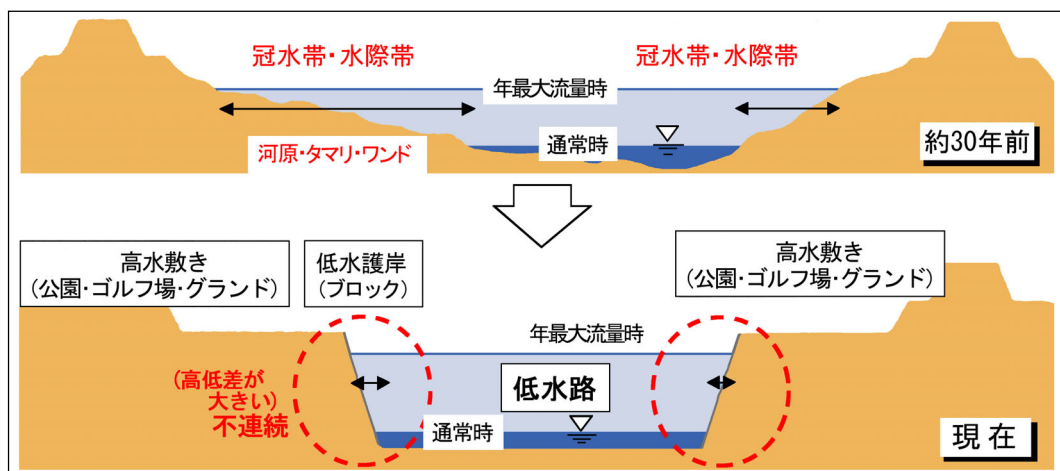


図1：30年間の淀川横断面の変化（綾史郎からの提供資料）

淀川復古、高水敷、低水路、冠水帯、水際帯、総エゴイズム

〒555-0011 大阪市西淀川区竹島3丁目7番4号、電話：06-6478-1028、FAX：06-6478-1026

スポーツ施設に対する存続及び新設の強い要望がある。

4° 淀川下流域円卓会議——川は野球・ゴルフの為のもの？

国土交通省近畿地方整備局淀川整備事務所が、淀川を旧の姿に戻す考えから、平成15年11月2日に大阪マーチャンダイズマートにおいて「河川敷保全と利用の方向性について」の円卓会議を催した（ファシリテーター 綾史郎、大阪工業大学工学部都市デザイン工学科教授）ところ、小味渕敦雄は「淀川河川敷ゴルフ場統一見解」として、市民の健康・体力作り、低料金のパブリック制、河川敷ゆえの平坦なコース等を理由にゴルフ場存続を語気荒く主張した。一方、(社)大阪自然環境保全協会の佐藤治雄は「淀川に『原野』の軸を」という表題で以下の如く主張した。（要点のみ）

いうまでもなく、新淀川は明治時代に旧中津川の流路に沿う形で開削された人工河川で、これは、数年置きに起こる河川の氾濫によって維持されてきた淀川河口部の広大な「原野(げんや)」という自然を、新しく作った2本の堤防の間(堤外地)へ押し込めたことに他ならない。「原野」は、人間の関与が少ないが故に維持されてきた、実に豊かな「自然」そのものである。この自然は、数年置きに起こる河川の洪水や氾濫による地形や植生の変化という、「不安定な環境」に依存した多くの動植物の生存環境であった。

この自然が致命的ともいえる圧迫を受けたのは、淀川の改修計画による河川断面の変更、及び、天ヶ瀬ダムや淀川大堰による淀川の洪水調節機能の増大による堤外地、特に高水敷の安定化である。即ち、淀川高水敷が、河川水位の上昇による冠水や、まして地形の攪乱を受けることが殆ど無くなった結果、国営淀川河川公園に象徴されるように、人間による高密度な利用を可能にしてしまった。その結果、淀川の上流から下流まで、原野と呼べるような環境は著しく減少し、かわって野球場や芝生地など、本来の自然とはかけ離れた、人間の為だけの環境が多くなってしまった。

この他、現状維持派としては、東淀川少年軟式野球連盟の山田裕之は「区内のグラウンドが十年程前から徐々に無くなり、しかも数少ないグラウンドの利用者が多い為、連盟としては難儀をしている。野球のグラウンドがそんなに自然を破壊しているとはとても思えない」などと述べて、既得権を言葉荒げて主張した。

5° 淀川中流域円卓会議——川は玩具(おもちゃ)か？

又、淀川整備事務所の主催により、淀川の中流につ

いての円卓会議(ファシリテーター 綾史郎)が同年11月16日、大阪歯科大学牧野学舎において行われた。ここでも自然回帰派と現状維持派の両派の意見が戦わされたが、現状維持派の急先鋒は枚方市役所理事の池貝浩であった。池貝は枚方市長の意向を受けたと称して、河川敷グラウンドの撤去は絶対不可であると強弁して、これまでの実績と既得権を強く主張した。傍聴している筆者達としては、枚方市役所(必ずしも枚方市民の意向を表している訳ではない)あつて淀川やその恩恵を受ける流域住民なしの観を呈していた。又、枚方市軟式野球連盟の宮本弘は、11月2日の下流での山田裕之以上に野球あつて川も日本国民もなしと言わんばかりの高いトーンで、河川敷における野球の為のグラウンド維持を強弁した。そして一主婦の小西孝子は淀川の川本来の役目は無視して、只々自分達が楽しめばいいという主張を行った。

6° 筆者の意見——ゴルフ・野球と遊びに溺れて日本崩壊

ゴルフ場も、主婦の中谷たか子が言ったように、ゴルフ場で日本列島を腐らせてしまった。枚方市のお役人には恐ろしい人があるものだと思う。戦前の自動車がない日本は馬に荷車を引っ張ってもらっていた。危機の為に最低限の自動車とか鉄道とかが要るけれども船とかを使えばよい。ゴルフクラブを振り回して人を殺したことがあった。枚方市役所の池貝浩理事が、国との片々たる経緯(いきさつ)を楯に取り、枚方市の都合のみ言い立て、川本来の役目と無関係のことを淀川に押し付けようとしている。戦前「3S」と言っ、よくないものとされた。「3S」は、スクリーン、セックス、スポーツである。映画と異性交遊とスポーツに溺れるなという教えだった。プロ野球の阪神がリーグ優勝したけれども、星野も「たかがスポーツだ」と言っている。えらいと思う。たかがスポーツ、勝とうが負けようが巨人なんかどうでもいい。河川という社会・国家にとり重大なる役目を持つものに、野球やゴルフはこっそり居候させて戴いている余計なものなのである。それが民主主義を履き違えて権利を主張するようでは、この国の前途は暗澹たるものである。

7° 多摩川復活——大都会に鮎百万匹(NHK TV「地球ふしぎ大自然」多摩川復活の秘密に迫る)

鮎は毎年遡上して産卵し、命を繋いでゆく。鮎の身になって作った魚道で鮎が復活した。